



告 別

芹 澤 光 治 良

校印廃止
©1960

告 別

著 者 芹澤光治良

昭和35年12月1日印刷

昭和35年12月5日発行

発行者 栗本和夫

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二〇一

電話(561)5924-9

振替東京34番

定価 280 円

告
別

S O 氏にこの小説を捧ぐ

これを書かなければならない所以を、貴方は誰よりもよく識っていられる。そして、この小説に「告別」と題した所以も、貴方は必ず悟って下さるものと信じて――

著者

一九六〇年九月



第一章

オルリーの空港に降りたのは、夜の一時すぎていた。

パリ人が宵よばりだといっても、女子寄宿寮が、こんな時刻に、父親の出迎えとはいえ、女子学生に外出許可をするはずはあるまい。娘たちはどんなに失望して、寄宿寮へ帰ったであろうか。宿舎も、国際的な賓客を迎える国際会館で、いつからでも歓迎すると、会長の申し出はあったが、ホテルとちがって、こんな時刻に出向くわけにもゆくまい。パリは観光シーズンで、絶対にホテルの予約が必要であると、出発前に旅行社の注意で、二人の同行者は二ヵ月前から予約してあるが、ともかくそのホテルへいっしょに行ってみよう――。

そう春川は肚をすえた。

実際その旅行は、出がけから、けちちがついた。

日本人の海外旅行は、外貨の関係で、公用の場合でなければ許可にならない。春川が数人の

同行者と、海外旅行を許可されたのは、七月十八日から、西ドイツのフランクフルトで開催される文学者の国際会議へ出席する、という名目であった。許可には滞在日数の制限があつて、一日二十五ドル乃至三十ドルの割合で、円貨を外貨にかえてくれるのだが、大体一人一ヵ月ぐらゐの期限である。一ヵ月の滞在費で、好きな国を、好きなだけ旅行せよ、というような冷酷な処置で、みな日程をきめるのに、さんざん苦労した。会議に出席する者のうち、二人が、フランクフルトに行く前に、パリへ出て、七月十四日の革命祭を見るために、十三日の夕方パリへ着く北廻りのエア・フランス機を予約した。春川も、フランスにくわしいからできれば同行して欲しいという二人の申し出で、その飛行機にきめた。ところが、出発の四時間前になつて、飛行機の整備がおくれて、三時間待つようになつた。次にもう五時間、もう三時間と、次々に延びて、最後には二十数時間後に出発するという始末であつた。

春川は十三日の夕にパリへ到着する予定で、十四日の午前中に、旧友のレオ・ジャルダンに会うことに、一ヵ月前から約束して来た。レオが革命祭がすみ次第、南フランスへ夏休暇のために出発すると知らせて来たからだ。二人の同行者は、十四日の夕にパリへ着けば、革命祭を見物できるからと、出発のおくれたのをがまんした。しかし、春川はレオとの約束や娘たちが空港へ迎えに出ることを考へて、エア・フランスのパリ本社から、レオと娘たちの寄宿寮に、電話をかけてもらうことを頼んだ。とくに、レオには重要な用件があるから、是非とも十五日にパリで会いたいと伝えてもらった。

そんなふうに、いらだって出発したのだが、アラスカの空港アンカレッジに着くと、再び整備に予定よりも四時間以上かかった。出発の時から、整備に手間どるのは、飛行機に何か欠陥でもあるのか、心配になって、アンカレッジで機長にかけあったところ、飛行機に欠点があるのではなく、日本の首相一行が、一便前の飛行機でパリへ発ったので、整備員がそれにのりこんでパリへお伴して手不足のために、羽田でも、アンカレッジでも、整備に時間がかかるのだという話だった。整備員を同伴させたのは、日本側の要求にしたがったのであるから、苦情はお国の政府にしてもらいたいというような説明だ。たしかに、春川たちを世話した旅行社の係りも、一便前の首相一行と同じ飛行機をえらぶ方が、安全で便利であるからと、熱心にすすめたが、代議士を引き具しての大名旅行は、見るのも不愉快だと言って、拒んだのだった。それ故、フランス人の説明も不服だったが、日本の首相の行動にも内心憤って、春川は思わず顔色をかえた。

「空港から二軒ばかりの近くに、鱒のつれる小さい湖があります。ご希望ならば、案内させませうか」

そう若い社員が機嫌をとった。場内は暖房がきいているが、外は雪がつもっていて、雪解けに、アスファルト道路がぬれている。誰も釣りに行くほど、心に余裕はないのか、応ずる者はない。春川は扉をおして、外へ出てみたが、夏服の肩から寒気が肌にしみて、全身がふるえた。鱒釣りに、鱒釣りの服装が必要なのに、いかげんなお世辞だったのであるうか。扉の外に

のりつけた自動車から降りた男は、両耳をおおうような帽子をかぶり、皮の厚いジャンパアに、長靴をはいていた。

「ここはエスキモーの住むところでしたね」

同行者の一人が、エスキモーのつくった土産物を見せて、微笑みかけた。夜のない北極の空の空がよんどで、今にも粉雪がおちそうな気配だ。

「革命祭を見たいと思って、パリへ直行することにしたが、このふんだと、失敗のようですね。首相の横暴をうらむより他にないかもしれないが……パリに行かないで、ハンブルグでおきて、ライン河をのぼって、フランクフルトへ出た方が、時間的にも、ドルの点でも、経済じゃないかなあ」

そう他の同行者が言った。

「十二時頃までにパリへ着ければ、革命祭のなごりは見れるだろう。一生の間には非一回は、革命祭をこの目で見ておきたいものな」

同行者は二人とも、恐らく、アンカレッジを出てから、そう同じことを心に繰り返しながら、腕時計と飛行機の数度とに気をとられていたのであるが、春川はずっと娘たちのことを考えていた。上の娘は四年ぶりに、下の娘は二年ぶりに会うのだが、寄宿寮の門限前に、飛行機が着かない場合の、娘たちの失望や狼狽が思いやられた。特に、下の娘は、十五日にはピアノの先生が滞在している田舎へ行って、その地のカジノで、七月三十一日にひらかれる演奏会の準

備をすることになっていたから——。

十二時前にパリへ着くからと、スチュアーデスに慰められたが、搭乗していた *super-star-liner* が、実際にパリのオルリー空港に着いたのは、一時過ぎていたから、春川はじめ、同行者も途方にくれたのだった。

パスポートや税関の点検がおわって、春川が解放せられたように、大きな鞆を引きずって、暗い改札口をぬけると、外側から鞆を受けとる青年があつて、

「お父さま、Iさんよ」と、突然下の娘の声がした。

「そちらの荷物もこちらへ」と、上の娘が小さい手提を奪うようにした。

娘たちも、東京で別れたままの恰好で、無造作であるが、春川自身も、

「なんだ、君たち来てたのか」と、あっさりしたものだ。

「Iさんが自動車クルマで迎えに来て下さったから、助かったわ」

春川は娘たちの手紙で、その青年のことは知っていたが、会うのははじめてで、初対面の挨拶をしかけると、相手はてれくさそうに、

「荷物はくるまへ運びましょう」と、軽々と大きな鞆をさげて外へ出ようとした。

「TさんやFさんもいっしょだがねえ——」

「Tさんたちもお迎えるの日本人が来ていました」

姉の方が春川に説明しているところへ、二人の同行者も出て来て、娘たちを紹介する間もなく、髪を長く背にたれて、スラックス姿の日本娘が、二人の同行者を荷物受取所の方へ案内した。

夜おそいためか、空港はあわただしく、春川は同行者と翌日の行動を打合わせ暇もなく、I青年に促されて、自動車にのりこんだ。

「お父さまは、健康そうだわ」

そう、妹の方が独言のように呟いたが、春川は手短かに、東京を発つ前後の模様などを、運転台の青年にも聞いてもらうように話した。娘たちも、寮長から特別許可をもらって、その夜、寄宿寮前のホテルに泊ることのできた顛末や、国際会館が何時に着いても、女中が起きて迎える約束したことなど話した。幾年もへだてて外国で、親子そろうことは、うれしいともありがたいとも、言う言葉もなくて、娘たちは、ただにこやかに喜びを全身にこぼしていた。運転台の青年も、オルリーからパリの街道で、フルスピードを出すのか、車はひゅうひゅうと、風を切るように唸っていた。

「パリへはいりましたが、モンパルナスをまわってみましょう」

そう青年は言ったが、外は暗く、パリの灯らしい灯もない。革命祭の名残りを見せようとする青年の厚意だが、モンパルナスも、キャフェが二、三軒あかるいだけで、人通りもない。

「今夜八時頃、Iさんが革命祭の賑いを見せて下さるといって、車で出て見たけれど、路上で

ダンスしているところなんかなくて、淋しかったわ。ねえIさん」

「パリでも、自動車旅行が流行で、若い人々は休暇になるのを待ちかねて、外国か田舎へ出かけるから、革命祭も年々淋しくなるようです。とくに今年は、淋しかったです」

「FさんやTさんは、革命祭を見たさにパリに来たのだが、失望するだろうな」

「でも、飛行機がおくれて、却ってよかったかも知れませんか。日本で想像していた革命祭が、こわされなくて——」

I青年はパリ市内へはいつてからも、フルスピードで走らせた。見覚えのある町や建物が時時窓をかすめて、春川ははっと息をのんだ。コンコルドやロンポアンがみごとにイルミネされて、噴水が美しく花火の役を果しているのは、革命祭の夜だからであろう。国際会館の所在がシャンゼリゼだというが、凱旋門が三色に色どられて見え出して、やっと車はスピードをおとした。そのまま国際会館に行って別れるのは、味気ないからとて、シャンゼリゼのキャフェで休みたいと、娘たちの主張だ。

二時だった。シャンゼリゼはまばらに人通りがあったが、キャフェはどこもテラスまで満員で、四人でかけられる場所をみつけるのに困った。しかし、パリ人のなかにまじって、明るい場所で娘たちを見ると、二人とも、東京にいた時そのまま、服装といい、髪形といい、表情といい、パリに染っていない。春川は思わず可笑しくなって、

「I君も変らないんでしょう？ 東京にいた時と——」と、青年に話しかけたが、

「貧乏ですし、勉強にはげんでいると、変りようが、ありません、ねえ」と、青年は娘たちに同感をもとめて微笑んだ。

日本の外貨事情の関係で、送金が許可されないために、若い留学生がパリで貧乏するのは、当然であるが、青年は日本の商社の支店長の家で、毎日午前中車を運転することで、留学費をえているとか、そして、その夜も、支店長の許可をえて、春川を迎えに来ていた。娘たちもアルバイトこそしないが、貧しい留学生生活であることは、青年と同様である。しかし、娘たちにも、青年にも、貧しさや卑屈さを感じられないのは、若さが、日常生活の欠乏をはじめとばしているのであろうが、また、毎日勉強と練習とおわれて、所謂パリ風にかぶれる暇がない、というのが、真実であろう。

「でも、お父様、あたし、フーコより背がのびたでしょう？」

そう、妹が笑いながら、むりに姉を立たせて、ならんでみせる茶目気は、しあわせだと、たくまず表わしていたが、姉を二寸も越したのは、二年間の寄宿舎生活が、健康なものであった証拠のようで、春川もほっとした。娘たちは立った序でに、国際会館に電話するといつて、そのレストランの地下室へおりて行った。

国際会館の女中が起きて待っているというので、カフェを出た。車はすぐ右に暗い路をまがってとまった。娘たちと青年が荷物さげて、道路に面した大きな鉄門のボタンをおした。そつと内側から開いたが、彼等がはいるなり、ぴちんと自然に閉じた。暗い石畳の内庭だった。

左側のビルの扉を押すと、自動的に弱い電燈がともった。階段とエレベエタアがある。エレベエタアにのると、灯がついて、自動的標識の六階のボタンを押した。静かに、静かにと、娘たちが囁きあい、爪先立って歩くのは、パリの習慣からであろう。地階の扉をおしてから二分間すると、自動的に灯が消えるので、いそいそでもいた。運よく、すぐ六階右側の扉が開いて、四十歳ばかりの大柄な婦人が、ねむそうな目で迎えた。無言劇のように身振りで、細い廊下をぐるぐる案内して、部屋の戸口をあけた。とたんに、廊下の電燈が消えた。一分間で自動的に消えることを後に知ったが……娘たちは荷物を部屋へはこび入れると、あしたねと、小声で囁くなり、女中と廊下へ消えた。まるで秘密の家のようだ。

部屋はまたおそまつで、大きな木製のベッドと洋箆笥と古い卓子に椅子が二脚ある限りで、じゅうたんも敷いてない。これが、国際会館で、しかも、パリの最初の夜かと春川はわびしく壁を見廻した。窓は一つで、鉄扉がおりているが、木綿のカーテンはよくしまらない始末――。

翌朝、ボンジュール・ムッシュという声といっしょに、戸口から、前夜の婦人がはいつて来るなり、お盆をテーブルにのせて、出て行つた。言葉をかける余裕もない早業だ。耳をたてるが、建物中森閑として、物音一つない。九時半すぎていた。春川は午前中にレオを訪ねなければならぬことや、下の娘がガール・ドリヨンをして十二時半発の列車で発つことなどを思い出して、あわててとび起きた。お盆には、コーヒの壺、牛乳の壺、クロワッサン二個、バター、どんぶり大の茶碗がのっている。三十年前と同じパリの朝食だ。

——そうだった、パリにいるのだと、春川はやつと納得したように、コーヒーの香をかいた。クロワッサンの味に、昔のパリ生活を思い出しているところへ、娘たちがはいつて来た。前夜I君に寄宿寮前のホテルに送ってもらい、今朝早く寮長に会って報告して、下の娘は夏休暇の別れをして来たといつて、旅行鞆をさげていた。

「レオ・ジャルダンさんにお電話しておきました。午前中はむりと思つて、午後二時半に会社でお会いすることにしたけれど、いいでしょ？ 私がご案内するから——」

姉の方がてきぱきそう話した。彼女は春川がフランクフルトへ発つ日に、妹と同じ田舎へ行くことにしていた。妹といっしょにその地のカジノで演奏会に出るが、声楽であるから、ピアノの妹のように練習のために、急いで行かなくてもいい、と言っていたが、その実、春川の世話をするつもりだった。春川は日本から持参したものを、ベッドの上にひろげて、娘たちの処置に委せた。娘たちがその演奏会に着るために、日本でつくつて来たソアレ類、娘たちの先生への土産、娘たちの世話になっている春川の友人たちへの土産など——娘たちが二ヵ月田舎に暮すのだから、田舎へ持つて行く物、寄宿寮に残す物、春川がドイツへ持つて行く物としわけをさせた。

娘たちは日本からの土産を前にして、東京の家のことを思い出すのか、整理しながら、ママはお元氣？ とか、親しい人々の消息をきくので、呑気に日本語を話しているうちに、うっかりパリにいることを忘れた。特に娘たちは、寄宿寮で日本語を使うことを遠慮しているので、

日本に帰ったようにほっとした面持だ。

娘たちは、ドイツの会議がおわつたらすぐ、演奏会の夕までに、ロアール河畔の鉱泉地に来るように、しきりにすすめたが、春川はドイツやアルサス地方を旅行する予定で、七月末日にフランスへ帰るのは不可能だが、八月から九月にかけて、フランスの田舎で娘たちと久しぶりに夏休暇をたのしむ約束をした。そして、下の娘をガール・ドリヨンへ見送った。

シャンゼリゼからガール・ドリヨンへは、パリの街を西から東へ横切ることになるが、春川は地下鉄をさけて、タクシーにした。八年ぶりに見るパリを、車の窓からでも眺めたかったからだ。眺めたからとて、どういふこともない。疲れているせいか、感慨もわかない。パリの下町も革命祭の翌日だといふものを、とどめていない。

ただ、リヨン停車場は、田舎へ出掛けるパリの庶民でいっぱい、革命祭のおわつたことを思わせる。ちょっとした商店の主はもちろん、中学校の先生でも、サラリーマンまでが自家用車を所有しているので、汽車を利用するのは、贅沢な病人か貧乏人ばかりだといふが、シャンゼリゼや大通りでは見かけないような、フランス人が、人間の博物館からでも出て来たようだ。きいろく色あせた麦藁帽子をきどつてかぶつた男、黒いストッキングに長い黒のスカートと外套をひきずるような婦人、場末の市場の店先にもつるしてあるような、けばけばしい型の服を着た子供たち、みな両手に持ちきれないように、荷物をさげて、パリの古い街々の隅々から、夏の太陽と空気をもとめて、田園へ出かけるのであろう。夏休暇、バカンスと、競つてパリか

ら逃れようとして、混みあっていた。

娘たちが夏休暇を過ごす鉱泉地プーグは、パリからヌベール市を経てニームへ出る幹線の駅であるが、鉄道を利用する者が少なくなつて、日に二本しか、急行がない始末で、列車は超満員だ。娘は半月以上も前に席を予約したから、二等席でもかけられた。日本でも独りで汽車の旅をしたことのない下の娘が、敏活に席をさがしたり、ホームに手押車で食料品を売りに来た女から、ハムパンやバナナなどを買って、昼食を用意したりするのを、春川は黙って眺めていた。

「お父様もこの汽車になさるといいわ。この駅にはホームがたくさんあるけど、まちがわないうちにね、十三番よ。一等ならば、予約しなくてもかけられますから……プーグでお迎えに出ますから、電報下さい」

独りで田舎へ行く心細さを、そんな言葉でごまかしたのであろう。汽車を見送って、春川は上の娘と駅前のレストランで、昼食をとりながら、下の娘がフランスでも、初めて独り旅をするのだということを知った。部屋こそちがえ、同じ寄宿寮で姉妹はいつでも何処でもいっしょで、気丈夫ではあったろうが、そのために、無意識のうちに生活がいびつになっていることはなからうか、春川はそれを心配しながら、上の姉には、そろそろ日本へ帰るようすすめるければならないことを考えた。

さて、そこから旧友のレオを会社に訪ねるのだが、娘たちがパリでジャルダン一家から、ど